

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」 ～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

小さなタネから広がる無限の世界

～タネっておもしろい～



学校法人古沢学園 広島都市学園大学附属保育園

目次

1. 「科学する心を育てる」とは	P 1
2. 当園の畑事情	P 2
3 実践事例. 「小さなタネから始まる無限の世界」	
～タネっておもしろい～	
(1) すいかを育ててみると	P 2
(2) タネ集め	P 4
(3) タネの中には何がある?	P 4
(4) 夢はふくらむ	P 5
(5) 失敗は成功のもと	P 6
～最強の天敵あらわる～	P 7
(6) ヒヨドリとの対決! 3回戦マッチ	
《1回戦》	P 8
《2回戦》	P 8
《3回戦》	P 9
～次のステップへ～	
(7) そうだ! 畑を作ろう	P 10
(8) はじめてのおつかい	P 12
(9) そして 今	P 13
4. 実践から学んだこと	P 14
5. 今後の課題	P 15

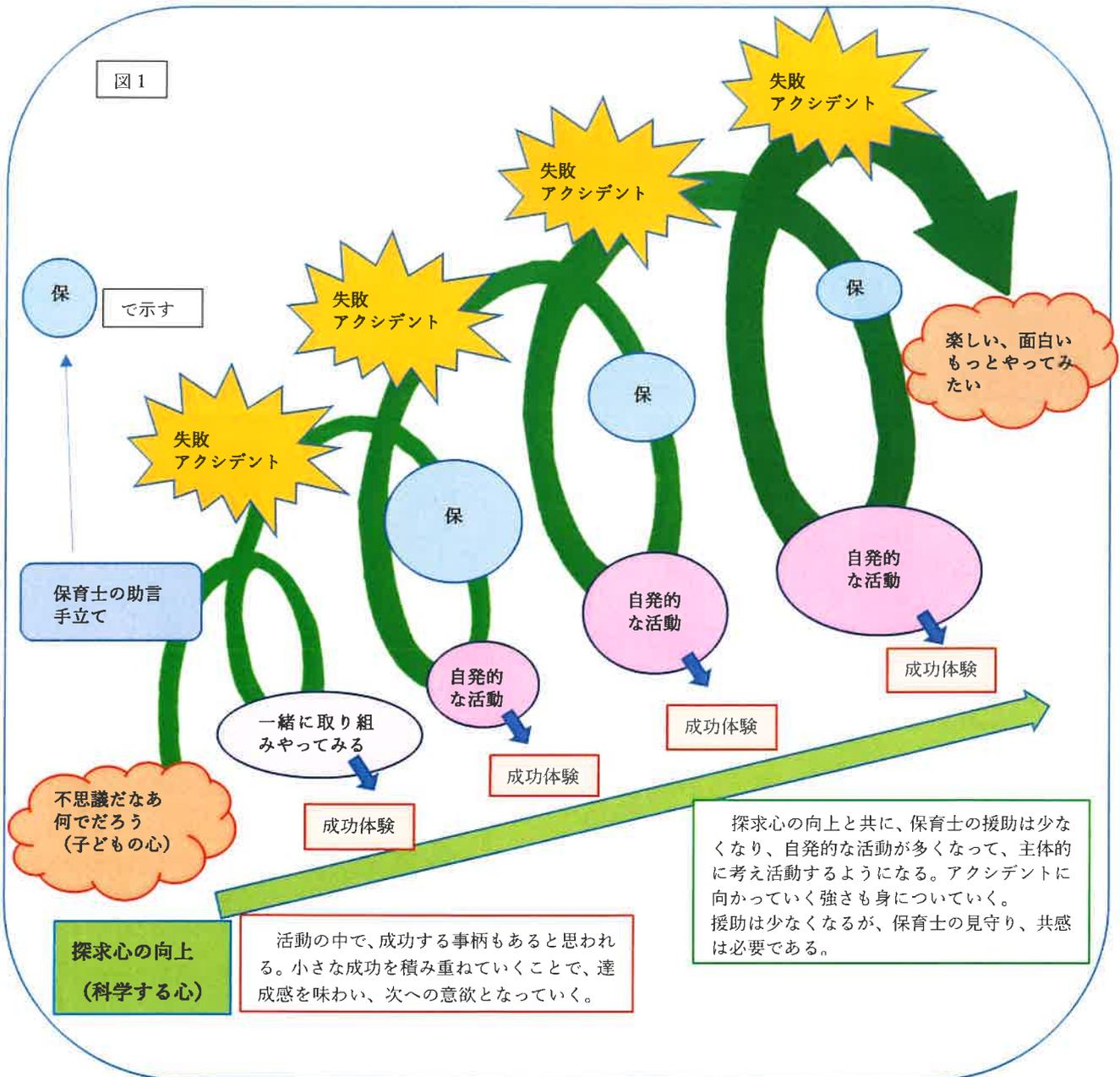
1. 「科学する心を育てる」とは

当園の考える「科学する心を育てる」とは

「科学する心」や「探求心」は人間が本来持っている意欲的な気持ちで、生きていくうえで大切な心であると思われる。教えられて育つものではなく、自発的な活動であると考えます。

インターネット等で調べてすぐに答えを見つけるのではなく、実際に自分や周りの人と考え、試してみても気づき、発見し、それが次への探求心へと広がっていくのではないかと。それができる環境(ヒト・モノ・コト)があるかないかで、子どもの心の育ちも変わってくると思われる。

これらのことは、当園の保育方針である“0歳からの主体性を育む保育”につながっていくことであると考えます。子どもが心を動かされ、興味を持ったことに、関心を持って主体的にかかわり、繰り返したり工夫することで、楽しさや喜びを感じる積み重ねが大切である。(図1) 周りの大人は、日常の中で子どもたちが「何でだろう」「不思議だな」「面白いな」と感じた瞬間を見逃さず、一緒に楽しみ、不思議がりながら、タイミングよく環境を整えていかなければならない。そのような環境の下でこそ、“科学する心”が育っていくと考える。



2. 当園の畑事情

開園（2020年）当初より食育の一環として野菜栽培をはじめ、毎年1歳児クラスから野菜を育ててきた。園舎裏に使用していない土地があり、そこに畑を作って栽培している。もともと畑用の土地ではなく、マンホールがあって、広くはなく、さらに日当たりも良くないこともあり、栽培がうまくいくか心配はあったが、自分たちで植えた野菜が生長することの楽しみを味わってきた。

うまく収穫できるものもあったが、「あと少しで収穫できる」という時にいろいろなハプニングが起こることも多かった。

3年目（2022年）の夏には、すいかを栽培した。実がどんどん大きくなっているのを喜んでいたら、ある日、カラスに中身が見えるほどつつかれているのを発見し、子どもたちは驚きと共に悔しさを味わった。また、同年、収穫した稲を干して、上からネットをかけていたにもかかわらず、すずめが下から入り込み、お米をほとんど食べられた、という経験もした。残念な思いもいろいろしたが、その経験を活かし、その年は、畑のできごとを取り入れた「劇あそび」を発表会で披露した。

うまくいかないことからの学びは、「どうしたらいいんだろう」「どうやったらうまくいくのかな」という探求心にもつながっていった。子どもたちが自ら図鑑を開いて、考える姿も見られた。職員たちは、野菜の栽培は収穫をすることだけが目的ではなく、それまでの過程での様々な出来事が、全て学びへと繋がることを改めて感じていた。

わずか3畳ほどの畑ではあるが、毎年様々なドラマが生み出されてきたこの場所における令和6年度から令和7年度にかけての子どもたちの姿を、「科学する心を育てる」という視点で振り返ることとする。

3. 実践事例 “小さなタネから広がる無限の世界”

～タネっておもしろい～

(1) すいかを育ててみると

※下線 は子どもの関わり、 は大人の関わりの考察に関する本文である。

年中クラスになった令和6年5月、「今年（の夏）は何を育ててみたい？」と子どもたちに聞くと、①「トマト」「きゅうり」「おくら」「とうもろこし」「すいか」「なす」など、たくさんの野菜の名前があがった。みんなで話し合い、どんなふうに大きくなるのか興味もあり、育てて食べてみたい野菜が、「すいか」「とうもろこし」「ミニトマト」の3つに決定した。早速、水やり当番を決め、苗を植えて野菜の生長を観察することにした。

毎日の水やり、観察が日課になり、子どもたちの楽しみになっていった。「すいかのつるが伸びてきた！」「花が咲いた！」などの変化に気づき、収穫できることを心待ちにしていた。

ところが令和6年の夏はととても暑く、①子どもたちが畑に行くには危険な気温の日もあり、日課としていた水やりに行けない日もあった。そのような日には、保育士が夕方や朝早く水をやり、そのときにタブレットで野菜の生長を撮って伝えるなどの工夫をした。ある日、タイミングをみて、気温を考慮しながら、子どもたちと一緒に水やりや野菜の生長を見に畑に行くと、花が咲いた後を残しながら小さなすいかができているのを見つけた。「これ、すいかの赤ちゃんじゃない？」「ほんとだ！すいかができよるね」「まだ小さいのに、しましまがあるよ！」など短い時間の中で食い入るように見ながら、それぞれの感じたことを表現していた。

考察①

・今まで、野菜を栽培する経験を繰り返しており、育てる楽しさ、自分が育てた野菜を食べる喜びを知っている（経験している）からこそ育てたい野菜がたくさん出た。

考察①

・子どもが見に行くことができないので、タブレットで写真を撮って見せる、という大人の配慮が興味関心を持続させている。

夏本番を迎え、連日「熱中症警報アラート」が発表され、水やりどころではなくなったが、子どもたちはすいかの生長をとてにも気にしていた。なぜなら、すいか割りの計画を立てていて、前回水やりをした時に3つのすいかの赤ちゃんを見つけ、「3回もすいか割りができる！」と楽しみにしていたからだった。

「先生、今日、畑行った？」「大きくなっとった？」と、見に行けないからこそ、いっそう生長が気になる子どもたちだった。時には液体の追肥をしたが、連日の暑さもあり、なかなか大きくはならなかった。テニスボールサイズの大ききまでは生長したものの、これ以上大きくなる兆しは見られなかった。②ここで子どもたちと、もう少し大きくなるのを待つか、収穫するかを、サークルタイムで意見を言い合った。

考察②

- ・サークルタイムが子どもの気持ちを尊重した時間になっている。自分の思いの発信を日常的に繰り返しているからこそ、関係性ができ、活発なやりとりが行われている。

「すいか割りしたいけえ、大きくなるのを待ちたい」「小さいすいかを見たい」「腐って枯れるかもしれないじゃん」など、見ることができないからこそ、いろいろな思いが出てきた。それぞれの思いを伝え合った結果、8月2日に収穫することに決定した。収穫したてのすいかを見て触りながら「かわいい！」「おもちゃのすいかみたい！」「つるつるだね」「あったかいよ！」「すいかは暑かったんじゃないかね」と、いろんな感情が子どもたちから湧いてきた。



令和6年8月2日



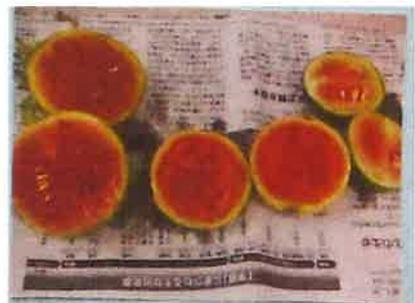
「じゃあ、このすいかどうする？」と聞くと、飾っておきたい子が多くいる中で「このすいかの中って何色なんかね」と疑問をつぶやく子もいた。「赤じゃない？」「まだ赤じゃないんじゃない？」「じゃあ何色だとおもう？」「赤にはなっとるけど、タネはまだないじゃろ」といろいろな考察合戦が始まった。

その日の午後、せっかくなので年少、年中、年長の3歳以上児クラスで集まり、小さなすいかを切って、中を確かめることにした。中を見てみると「ああ、赤くなっとる！」③「ほら！やっぱりタネもあるじゃん」と興味津々の子どもたちだった。④

考察③

- ・「やっぱりタネもあるじゃん」の言葉に推察通りの喜びが出ている。

一人の子が「タネ、取ってみたい」と発言したことから急遽、めん棒を使っての“タネ探し”が始まった。とても小さなすいかではあったが、タネがしっかり入っていたので、子どもたちは順番に宝探しのようにタネ探しを楽しんだ。



その日の給食のくだものが、メロンだった。メロンにクリーム色のタネがついていたのを見つけた子が

②「すいかとメロンって、なんか似てるけどタネは白と黒なんじゃない」「タネって色々あっておもしろいね」などの子どもたちの会話から、「タネ集めしてみる？」と提案をしてみた。

考察②

- ・「すいかのタネ取ってみたい」という子どもの発信をすぐに受け止めたことと、ちょうどその日の給食にメロンが出て、すいかとの違いに興味を持ったことで、タイミングよく「タネ集めしてみる？」と提案できてより関心が深まった。

(2) タネ集め

まずは、給食の果物についていたタネから集めはじめた。給食のトマト煮込みの中に「トマトのタネみつけた！」というほど、すぐにタネへの興味は広がった。③保育士がオクラ、ゴーヤのタネを持参し、タネの紹介をすると、子どもたちも家からいろいろなタネを持ってくるようになった。

もも、うめぼし、ピーマン、おくら、かぼちゃ、りんご、外国のりんご、ぶどう、シャインマスカット、イチジク、パイナップルなど、たくさんのタネが集まった。

④家庭でのタネ集めのエピソードもいろいろあった。

1. 驚いたのは、イチジクのタネである。どのように採ったのか気になり、保護者に話を聞いてみると、「イチジクを食べていると、このタネも持っていきたいというので一緒に茶こしでこしてみました」と言われた。

2. 保護者から「買い物に出かけたとき、『少し苦手な野菜を買って』と言われたので、どうしてそんなことを言うのか理由を聞いてみると、食べてタネを持っていきたいからだ」と知り、その野菜の中にはタネがあることを知っていて、タネを持っていきたい気持ちから苦手な野菜も食べてみようって思っているんだと成長を感じることができました」という話が聞かれた。

タネを通しての会話や、一緒に採りだす作業など、親子での楽しいやり取りがあったこともうれしく感じた。

考察③

- ・大人がきっかけ（タネを持ってくる）を作り興味を深める関わりをしている。そのことが子どもたちの「集めたい」「自分も」という気持ちに繋がっている。

考察④

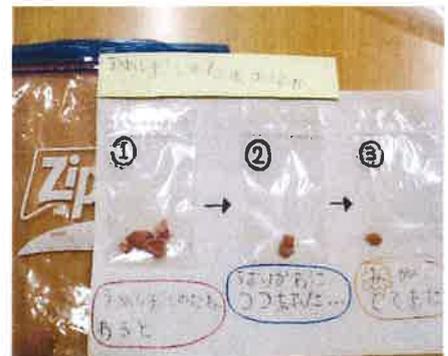
- ・「タネ集め」という子どもの熱い思いが伝わって、保護者の心もワクワクさせ、タネ集めへの協力や保育への関心を深めることができたのではない。
- ・タネを持って行きたい気持ちから、苦手な野菜も食べてみようとする行動が、タネに対する興味関心の強さを感じる。

(3) タネの中には何がある？

⑤集まったタネは透明なカップに入れて、みんなが触れるように展示した。



「すいかの（実の）方が大きいのに桃の方がタネは大きいね！」「すいかにも白いタネがあるね」など見たり触ったりとタネ比べが始まったころ、④年長児が家で梅のタネを割り、中がどうなっているのか調べて持ってきてくれた。



考察⑤

- ・見える工夫をしたことで、子どもたちの意欲が高まった。

きてくれた。

それを見て、タネの中にまだタネがあることを知った子どもたち。どのタネ

の皮が剥けるのかいろいろ試しながら、タネの皮むきが始まった。剥けたのはゴーヤだけだったが、それもタネへの興味を湧く出来事になった。

また、給食室に行ったり、調理員が部屋に来た時には、「野菜や果物のタネをとっておいてください」とお願いをし、より多くのタネが集まった。

考察④

- ・年長児は興味だけでなく探求心も生まれている。気づいたこと、発見したことを伝えてくれたことで、クラスの垣根を超え、「タネの皮を剥ぐ」という経験ができた。

※給食の時間には、調理員が部屋に来て、ご飯やおかずを個々の希望に合わせてよそってくれている。その際に、子どもたちと野菜や食べ物クイズを楽しむなど、調理員とも深いかわりを持っている。

⑥ しっかりタネに親しんだころ、「このタネどうする？」と聞いてみた。するとすぐに、「植えたい」という声が出た。そこで、「子どもたちにタネから芽が出るところを見せてあげたい」という思いから、あえて土ではなく、たっぷりと水を含ませたコットンの上にタネを置いて、発芽の様子を見られるようにした。※育てたいタネは子どもたちが選んだ。

考察⑥

- ・子どもと一緒に家庭でもおもしろがる気持ちが広がって、タネの中身にも関心を持った。さらに調理員に協力をお願いするという行動力、発信力が芽生えた。
- ・自分の考えや思いが形になる、かなえられるという経験はそれがどんなに小さいことでも自信につながると思われる。
- ・コットンを使用してタネがよく見えるように工夫し、子どもたちが毎日、観察したくなる環境作りであった。
- ・「植えたい」思い+保育士の願い・工夫が、子どもたちの観察力や探求心・興味を深めることに繋がっている。

(4) 夢はふくらむ

窓辺に置き、観察が始まった。毎日の観察の中で、色が変わったもの、水分を取り込んで大きくなるだけのもの、カビが生えてしまったもの、連休の間にカラカラに乾燥してしまったもの、と失敗に終わったものも多くあった。そのような中で、⑤無事発芽し変化がみられると、「あれ？タネから何か出るとよ」「葉っぱみたいなんも見えるね」など、タネが変化する様子を愛おしそうに見ながら観察が始まった。

また、年長が育てたかぼちゃと、給食室からもらったかぼちゃで、2種類のとれたてのタネを匂ったり触れたりした。この頃は、「かぼちゃのタネ」のフレーズからあちこちで手遊びの“お寺和尚さん”をする子がふえてきた。タネ集めから手遊びに発展する子どもたちの発想に面白さを感じた。

そうしてしばらくすると、「先生、まだ土に植えないの？」という声もあがり、土に植え替えをすることにした。

⑦ 「ねえ！メロンがいっぱいできたらどうする？」

「給食先生にお願いしてみようや」

「フルーツポンチがいいんじゃない」など、たくさんメロンができることを想像し、みんなで会話を楽しみながら、夢もふくらんでいった。まだ発芽したばかりの状態だったが、調理員にも「メロンがいっぱいできたら、フルーツポンチつくって！」とお願いに行く子もいた。

土に植えかえ、場所も部屋から廊下へ変えて、よりみんなの目に触れるところに移した。



考察⑤

- ・タネから芽が出るところを見る経験が、子どもたちの観察力や学びに繋がっている。

令和6年9月20日



朝夕の保護者の送り迎えの時には

保護者 「メロンって芽がでるんじゃね」

子ども 「そうよ！」

「いっぱい出来たらフルーツポンチにしてもらうじゃあ！」

保護者 「いいね。お母さんも食べたいな」

子ども 「いっぱいできたらいいよ！」

など親子の微笑ましい会話がよく聞かれた。



考察⑥

- ・子どもや保護者、他クラスの人の目にふれるところにおいたので、思いを共有できた。
- ・小さなタネひとつから、願いと想像を経て「フルーツポンチ」にまで結びつく事に、子どもならではの感性の育ちを感じた。
- ・子どもたちのタネへの関心が家庭での会話につながり、保護者も巻き込んでタネを集めたり、野菜を観察したりしながら連続性が生まれ、探求心が育まれている。

(5) 失敗は成功のもと

暑さが少し落ち着いてきた秋ごろ、よりみんなに見てもらえるよう正門横に移動した。ところが、少しの間は生長をしていたが、朝夕の涼しさや日中の気温、急な温度変化に黄色くなり、枯れてしまった。

家からタネをもって来るブームはなくなったが、子どもたちの“タネへの愛”は続いていった。⑦調理員が部屋を訪れるたびに、「給食先生、タネなあい？」と言っていたので、「今度から、にじ組の果物はタネ付きでもってこようか？」と言われ、大喜びの子どもたちだった。秋になり柿が出るようになると、「やったあ！タネついとった！」「なんかいいことあるかも！」「2こもあった！」「いいなあ」「ああ、入ってなかった！」とタネが当たりくじのようになっていた。

食べた後は「せんせい。このタネどうするん？」と聞く子もいれば、進んでタネを洗いティッシュの上に乗せ、植える準備をしている子もいた。⑧柿のタネは水を含んだコットンの上に置いたものの、発芽につながらなかったことを経験した子どもたち



は、「土なら芽が出るんじゃない？」という考えも出て、「じゃあ土に植えよう」と、さっそく土づくりをした。野菜果物用の土に腐葉土、石灰も混ぜてタネを入れ、「柿ができますように」とお願いもした。そのころ“さるかにがっせん”の話を見ていたこともあり、「はやくめをだせ かきのめよ ださぬとはさみでちょんぎるぞ！」と言いながら見守り、水やりをする子もいた。

しかし、やはりなかなか発芽につながらないまま、子どもたちの興味も薄れていった。

しかし、やはりなかなか発芽につながらないまま、子どもたちの興味も薄れていった。

金時豆の成長

しばらくすると、⑨給食の時間に「今日の給食にこの豆が入ってるけど、何かわかる？」と調理員が金時豆を持ってきてくれた。子どもたちは「えだまめじゃないよね？」「いん

考察⑦

- ・子どもたちから「タネない？」と聞くほど“タネ”のとりこになっていることが伝わる。
- ・調理員も子どものブームを共有している。協力が大きい。

考察⑧

- ・“成功”だけではなく“失敗”する経験が学びとなっている。

げんまめ?」「だいず?」と知っている豆をとりあえず聞いていた。「きんときまめ」って言うんよ。これも植えたらね、豆ができるんじゃないかね」と教えてもらい、豆なのにタネにもなることに子どもたちは驚いていた。キラキラな目をして、「すぐ植えたい!」とさっそく準備にとりかかった。12月に入り季節は冬になっていたのも、寒さで弱らないように、また生長を間近で見ることができるようにと、室内で育てることに決めた。今までも、なかなか育たないことや、失敗に終わったことも多かったのも、保育園が休みの日には、日差しが当たる廊下に出して帰るなどして生長を見守った。※夜は遮光カーテンを閉めて帰るため、保育室では、休みの日は日差しが届かない環境にあるため。

考察⑦

- ・タイミングの良い大人の働きかけで、次の活動へのきっかけとなっている。



令和6年12月10日

するとある日「せんせい。なんか芽がでてきてよ!」「豆も見える」「豆から伸びてきてよ」「恐竜の卵みたい」など豆から葉っぱが出る様子を恐竜の誕生と見立て、金時豆が変化しながら生長していく様子をじっくりと観察していた。やがて花が咲き、「金時豆の花って白いんじゃない」「花が枯れたら豆できるんよね?」と花が咲くところまでを見届けるのがひさしぶりなので、楽しみに待っていた。花が枯れ、実がつき始めると、実の大きさ(長さ)をチェックしていた。ある時「豆が黄色くなると!」



令和7年2月18日

と気づき、集って観察を始めた。枯れてしまったかと心配をしていたが、「あ!中に赤いのがあるよ!」「ほんまじゃ!まめができたんじゃないん?」「できとるか、確かめてみようや」という声があがり、開けてみることにした。すると、中からえんじ色の金時豆がでてきた。「植えたのとおんなじのがでてきたじゃん!」「えっ?これ植えたらまたできるんじゃない?」「かわいい」など豆は1つしかできなかつたけど自分たちで育て、実になったことが何より嬉しい成功体験になった。

考察⑨

- ・今までの経験から、「こうしたら、こうなるのでは」ないかと予測して主体的な行動となっていた。
- ・試行錯誤しながら育てた金時豆が実になった喜びを、保育者と子どもが共有したことで、感動体験が深まりさらに意欲や好奇心が高まった。
- ・観察することを繰り返すことで、徐々に変化し、生長していく様子を楽しんでいる姿から、観察力が育っているを感じる。
- ・大人がきっかけを作らなくても、様々な経験を繰り返し、子どもたちが主体的に行動している。経験が学びに繋がり、「考える力」がついてきている。

～最強の天敵あらわる～

すいか・とうもろこし・ミニトマトの夏野菜は収穫して食べるまでにつながらなかったが、冬野菜は何を育てたいか、子どもたちに聞いてみた。いろいろな意見が出たが、子どもたちの考えや思いから次の3つに決まった。

ブロッコリー … 「給食でフラワーサラダ(ブロッコリーとカリフラワーのサラダ)が出て美味しかったけえ、ブロッコリーを育てたい!」

きゃべつ … 「きゃべつに卵を産んでチョウを育てたいからキャベツにしたい！」
夏にアゲハチョウの幼虫を育てるも、休み中にレモンの葉っぱを入れている容器の水に落ちてしまいチョウにならなかったことを経験しているため。

そら豆 … ⑩「金時豆ができたから(芽がでたから)違う豆を育ててみたい！」

という子どもたちの考えや思いから、この3つに決まった。

きゃべつとブロッコリーは苗から、そら豆はタネ(まめ)から畑に植えた。冬野菜の生長はゆるやかなので、1週間に2~3回のペースで観察や水やりに行った。そら豆が豆の間から芽を出し始めると、⑪「金時豆は(豆が)上に上がってきたけど、(これは)あがらんね」と豆の芽の出方の違いに気づく子もいた。それを周りの子にも伝え、その不思議さをみんなで共有した。

考察⑩

- ・金時豆ができたという成功体験から生まれた意欲的な発言である。

考察⑪

- ・タネの違いから芽の出方の違いに気づける観察力が育っている。

(6) ヒヨドリとの対決! 3回戦マッチ

《 1回戦 》

令和7年2月3日



ある時、畑に行くと、「ええ!なんかうんちがいっぱい落ちとるんじゃけど!」と、ブロッコリーを植えているすぐそばの柵の横に落ちている鳥の糞を、子どもたちが見つけた。ブロッコリーを覗くと、「ああ!食べられとる」と大騒ぎになった。「虫が食べたんかね?」



「でも、ここにうんちがあるけえ鳥じゃない?」「もう、どうしたらいいんじゃろ?」と話しあいが始まった。⑫「ネットして、鳥が入らんようにしようや!」と子どもたちからアイデアがでて、早速ネットを準備し「柵に止まらないように上からかけよう」「下が開いとるよ!(鳥が入るよ)」と、ネットの向きを縦にしたり横にしたりいろいろ意見を出し試行錯誤しながらネットの取り付けをした。柵の下に糞が落ちていることを見つけ、柵に鳥が止まっていることに気づける子どもの観察力に驚き、感心した。

考察⑬

- ・植物と触れ合う中で、いろいろな生物にも関心が深まっているのを感じる。

これで一安心と思っていると、⑭「でも、鳥の食べるものがなくなるけん、かわいそうじゃない?」とつぶやく子もいた。自分のことだけではなく鳥の心配もする優しい思いも育ってきてるんだなとあたたかい気持ちになった。

考察⑫

- ・失敗を経験しているからこそ“次は成功したい”という行動に繋がっている。
- ・「どうしたらよいか?」を一人ひとりが考え、試行錯誤する姿は、考える力、行動力に繋がっている。

《 2回戦 》

ところが、その日の昼に、ネットの中にまで入ってブロッコリーを食べるヒヨドリを担任が発見し、子どもたちにも伝えた。

「ネットをもっと張った方がいい!」「どうやって食べよった?」と写真を



見ながら「ネット（の隙間）がもうちょっと小さかったら入ってこんのんじゃない？」と子どもたちがそれぞれの考えを伝え合い、ネットの張り替えをした。家でも野菜を育てている子どもが「鳥は光るもの



が嫌いなんよ」と教えてくれ、アルミホイルを丸に切り、それをネットに取り付けたり、柵とネットを洗濯ばさみで止め、隙間が無いようにしていると、「ピーピー」とヒヨドリが畑の上にある電線に止まって鳴いていた。それを見ながら、「どうやって入ろうか見とるんじゃない？」

考察⑭

・ヒヨドリに食べられているブロッコリーの様子を見てあきらめそうになるが、もう一度ネットをはりかえるという粘り強さが育っている。

「もう、はいれんけんね！」「ヒヨドリにはあげんよ！」と悔しい思いをぶつけている子もいた。この日から、ブロッコリーの様子やそら豆やきゃべつの生長を、毎日、見に行くようになった。週明け、いつものように畑に行くと鳥の糞が落ちているのを子どもたちが発見した。急いでブロッコリーを見に行くと、ほぼ食べられていた。

これを見た子どもたちは、「この鳥野郎！」「食べるところでうんちするってどういうつもりなん！」「はらたつう！！！」と怒りや悔しさをあらわにしていた。公道に面したところに畑があり、子どもたちの言葉にヒヤヒヤしたが、担任の私も「さすがにこれはもう無理かな」と思うほど壊滅的に食べられていたので、子どもたちの悔しい気持ちはよくわかった。



令和7年2月12日

《 3回戦 》

「ブロッコリーどうする？」と聞いてみると「もうヒヨドリにあげる」「ひよどりってすごいね」というあきらめの声も出はじめていたが、「ぜったいにヒヨドリにはあげん！」「ヒヨドリには負けんけえ」「わたしらでそだてようや！」と強い意志を表す子もいた。怒ったり、悔しがったりする子、あきらめようと口にする子など、子どもたちの中でもいろんな感情があったが、「育てたい」という熱い思いを受け止め、引き続きブロッコリーをみんなで育てることにした。

まずは鳥の糞を一緒に片づけ、再度ネットの張り替えを行った。子どもたちが率先してネットの隙間を見つけ「ここから入るかも？」と気になるところはすべて紐や洗濯ばさみで止め、下の隙間は「プランターの下に入れよう！」とみんなで持ち上げヒヨドリに打ち勝つ対策をした。



秋に玉ねぎも、同じ畑に植えていた。水やりをしていると「なんでブロッコリーだけ食べられるんかね？」「たまねぎは臭いけえじゃない？」とねぎの部分に触り、「たしかに臭いね」と鳥の気持ちになったり、キャベツやそら豆も食べられていないことに気づき、ヒヨドリにも好き嫌いがあることを感じていた。

考察⑮

・天敵があらわれ、試行錯誤するがうまくいかず、さらに考え努力したからこそ、悔しい気持ち、あきらめなくなる程悲しい気持ちが生まれた。いろいろな感情の芽生えが心の成長にも繋がっていった。そして、“あきらめない心”が打ち勝つ対策への行動力になっており、逞しさを感じる。

考察⑯

・ヒヨドリにブロッコリーを食べられてしまったからこそその気づきや発見である。たまねぎは食べられていないという気づきが、観察力の深まりを感じる。

もう無理かと思ったブロッコリーも、子どもたちの見守りと世話で、親指サイズくらいのとても小さなブロッコリーができはじめた。「ブロッコリーの赤ちゃんができとる」と小さな声で言う子どもたち。赤ちゃんブロッコリーの誕生を愛おしそうに見ながら静かに喜んだ。毎日ヒヨドリが来ていないか糞や隙間チェック、水やりや見守りの中、少しずつ大きくなっていくブロッコリー。そして無事、収穫するまで生長することができた。あれから、ヒヨドリは畑に来ることはなかったが、前以前、怒りをあらわにしていた女児3人が、収穫の時には「これヒヨドリにあげる」とブロッコリーの葉をちぎって柵に挿していた。ヒヨドリと戦うこと3回戦！なんとなく同志のように感じていたのかもしれない。



考察①

- ・多方面から愛着をもって観察することで「気づき」や「考えてみる」力が培われていると感じる。
- ・命の大切さや自然との関わりに対する思いやりの心・豊かな感性が育まれている。
- ・怒りや悔しさを糧に、考え工夫し成功したブロッコリー栽培の経験は子どもたちの自信になっていったと思われる。

～次のステップへ～

(7) そうだ！畑を作ろう

数人の子たちが、みんなで集めたタネを植えたいと話していたので、みんなに提案してみた。すると他の子たちも「植えたい！植えてみたい！」と同じ思いだったが「でも、全部は多すぎて植えれないんじゃない？」「そんなに植えるところないよ」「全部は無理！」



令和7年2月19日

と植えたいけど畑の大きさの問題があった。今の畑は、地植えのスペースとプランターのスペースがある。「全体を畑にしたら大きい畑になるかもね」と伝えると「じゃあ、はしっこからはしっこまで畑にしようや」「大きくしたらいっぱい植えられるかも」とメジャーをもって畑の大きさを計りに行くことにした。みんなで大きさを計り、さっそく「※えいこさん、畑をおおきくしてもいいですか？」「畑を作りたいです！」と園長に直談判をした。みんなで集めたタネを植えたいことや思いを伝えた。



※令和7年2月より～子どもも職員も一人一人を大切にする。子どもと先生という上下の関係ではなくフラットな関係作りができるよう「○○先生」から下の名前ですと「○○さん」と呼称を変えた。

ここからは年中だけの取り組みではなく他の学年の子どもたち、職員、調理員も巻き込み、園全体で「畑プロジェクト」が始まった。まず、職員で畑の場所についての話し合いの場をもった。

話し合いで出た意見

- 今ある畑は園舎裏にあるが、そこにはマンホールもあり、全面を畑にすることが難しい。
- 園舎裏に行くには、隣接するマンションのアスファルト塗装の駐車場の横を通るので、特に夏は熱気で高温になりやすく、子どもたちが毎日、朝夕水やりをするのは難しい。
- 大学と同じ敷地にある保育園なので大学の空き地を借りて新たに畑を作るのはどうか。

など、場所を変えることも含め、いろいろな意見がでた。

以上のことを踏まえながら、⑧担任としては『子どもたちがいつでも観察ができ、世話ができる環境を大切にしたい』との思いが一番にあったので、そのことを伝え園庭の一面に新しい畑を作ることに決定した。

場所が決まり、畑づくりは、芝の剥ぎ取りからスタートした。職員みんなでシャベルを持ち園庭にびっしりと生えた芝を何日もかけ剥ぎ取り、ブロックを運び入れ、枠づくりをした。

令和7年3月27日



⑨次に子どもたちが土運びをした。野菜の土だけで 50 袋以上+鶏糞や牛糞、石灰もあった。子どもたちだけで運べるかと心配していたが、何度も往復したり、友だちと一緒に運んだり、段ボール箱に土を入れて子どもたちなりに工夫をして全て運びきることができた。

長いシャベルを持ち、土を混ぜ合わせ念願の新しい畑が無事に完成した！！

園舎裏の畑と園庭に作った畑と2つの畑ができた。子どもたちが園舎裏の畑は「ほいくえんのはたけ」、園庭につくった畑は「みんなのはたけ」という名前をつけ、看板も作った。

畑の準備が出来上がると、次は何を植えるか考えた。集めたタネの植える時期を図鑑と一緒に調べていった。昨年の夏から始まったタネ集めだけに、どれも6月から植えて夏

にできるものばかりだった。⑩畑ができたのは3月の末で、それから6月まで待つのは間延びがするかなと感じ、「春に植える野菜も調べてみる？」と聞くと、「ほうれん草」と「こまつな」「アスパラガス」が春に植える野菜と分かった。子どもたちと話していると、ある子が「“にしまがり”にタネ、売ったよ！」と言っていた。ニシマ加里・・・？何の名前か分からず繰り返し聞いても、周りの子も「そうよ！“にしまがり”の入るところにタネがあるけえ、いこうや！」と行き方も

身振り手振りで伝え、担任を説得してきた。話をよくよく聞いてみると、西松屋と DCM が入っているホームセンターの入り口に、タネを売っていることを伝えなかったようだった。

考察⑧

・子どものことを第一に考えて場所を決めたことが、今後の活動に大きく影響していくと思われる。



考察⑨

・大人がより良いタイミングを考えることで、新しい野菜にも関心を持ち、後の活動の广がりに繋がっている。

考察⑩

- ・「子どもたちの思い」にひっぱられる形で、他のクラスの職員からの応援があり、みんなの力が終結した畑作りになった。
- ・「1つのタネ」から「畑作り」まで発展し、目標達成のためクラスで一致団結して頑張っている姿に成長を感じる
- ・「もっとやってみよう」「自分たちで畑を作ろう」と行動に移したことから、自ら課題を見つけ、取り組もうとする姿勢が育っている。また、子どもたちがみんな力で力を合わせ、一つのことを成し遂げようとする協働性も育っている。
- ・昨年の夏のスイカから今までの栽培の子どもたちの姿を見た上で、畑作りを考えた担任の熱い思いも子どもたちの原動力に繋がっている。

令和7年4月

そして、子どもたちは、年長クラスとしての春を迎えた。

(8) はじめてのおつかい

令和7年4月10日



みんなで買い物に行くのは初めてだったので、この日をとても楽しみに待っていた。園の近くにホームセンターのコーナンもあり、「(コーナンの方が) タネがいっぱいがあるからコーナンに行きたい」という意見が出て、近くのコーナンに買いに行くことにした。たくさんの種類のタネを前に、「あっ、ほうれん草みつけたよ」「すいかもあるし、メロンもあるじゃん」とワクワクした様子で見まわった。タネを見ている中で、⑩葉物系のタネの陳列を見ながら、「これどうやってタネになるかね?」「だってタネないじゃんね」と実の中にタネがないものは、どうやってタネができるのか疑問を口にする子もいた。たしかにそうだなと感じ、植えて育てて食べるだけでなく、その先の生長も観察しても面白いのではないかと思った。

考察⑨

・色々な野菜の生長を観察してきたからこそ生まれる疑問である。収穫したら終わり、ではなく“タネから植えて、タネになるまで”を想像して楽しんでいる様子が伺える。



園に帰り、さっそく畑にほうれん草と小松菜のタネを植えた。⑪ほうれん草のタネは(チラウムタネ子粉衣=殺菌剤が塗ってあるため)赤い色だった。まさか赤いタネが出てくるとは思わず、子どもたちも「え?なんで赤いん?」と不思議がっていたので、ほうれん草のタネづくりまでいったら、採取したタネと見比べるのも面白いかなと思ひ、今は謎のままにしている。「ブロッコリーの花って黄色いんじゃないか」「タネはどこにできるんかね」と収穫した後のブロッコリーときゃべつの観察も続いている。タネになるのを待ちながら、チョウがキャベツに卵を産んでくれるのも楽しみにしている。

考察⑩

・知っている知識をすべて教えるのではなく、あえて“謎のまま”にしておくのも、保育者の工夫の一つである。子どもたちの気づきを待つことで、“疑問”“不思議”に繋がっていく。そうすることでさらに「知りたい」という探求心や好奇心が高まり、主体的に調べたり考えたりしていく姿に繋がっていく。

ら、採取したタネと見比べるのも面白いかなと思ひ、今は謎のままに



アスパラガスはタネだと1年以上もかかるとのことだったので、アスパラガスの根を買った。根を四方八方に広げ、土を子どもたちと一緒にいれた。すると、ふわふわとした葉っぱがどんどん伸びてきた。⑫「まだ、私の方がおおきい!」「ああ、ぬかされた」と背比べをしたり、メジャーで大きさを測って楽しんでいる。



令和7年5月2日

考察⑫

・自分たちでメジャーを使って測ることで、数への関心も高まっている。
・収穫できるかできないか、ではなく、アスパラガスへの愛着が芽生え、成長を楽しんでいる様子が伺える。



令和7年5月8日

①ここにきて担任の痛恨のミスが発覚した。アスパラガスは根から植えても実るまで1年以上かかること、その後は多年にわたり実り続けることが分かった。しっかり調べていなかったことを反省した。卒園樹ならぬ卒園野菜になりそうである。

子どもたちに、申し訳ない気持ちでそのことを伝えると「おじいちゃんが植えとるけん知ったよ」という子や「卒園して今度遊びに来たときは、できとる？」(卒園した夏に、園に来て在園児とふれあう行事がある)など思いのほか、あまり残念に思う子はいなかった。②それはアスパラガス(野菜)とかけ離れたふわふわした現在の形や、1日に10センチ以上も伸びる芽との背比べ、小さなつりがね状のつぼみができ始め、これが花になるのかタネになるのかとどんなふうに変わるのか、など今を十分に楽しんでいるからではないかと感じた。

考察①

- ・大人のミスをあやふやにせず、真摯に伝える姿、そして今までも真剣に子どもたちと向き合ってきた姿があるからこそ、アスパラガスが実るのに時間がかかるということを残念に思う子どもが少なかった理由の一つと思われる。

考察②

- ・野菜を収穫することだけでなく、生長の過程を楽しむことができるほど、野菜に親しんでいる姿に今までの関わりの深さを感じる。

(9) そして 今

はじめは、「いろいろなタネがあって面白いね」から始まり、芽が出る嬉しさやいつまで待っても出ないさみしさ、ときに水やりを忘れていたことを後悔したり「大きくなってねって話しかけたけん、大きくなってくれた」と喜んだりと様々な思いを経験した。失敗を繰り返しながら芽が出る喜びを感じ、次にヒヨドリとの戦いで、どうすれば野菜を守れるかを考えるようになった。何とか育てたい気持ちと自分たちが育てた野菜が鳥の食べ物にもなること、その野菜を守ることで、鳥の食べるものがなくなることも知った。また、そら豆にはアブラムシがつき、その近くに3匹のてんとう虫がいた。いつもなら、てんとう虫を捕まえようとする子どもたちだが、「てんとう虫はアブラムシを食べてくれるけん、とっちゃあだめよ」と教えてくれる子があり、③「アブラムシはそら豆が好きなん? で(それで)、てんとう虫はアブラムシが好きじゃけん寄ってくるっていうこと?」と理解する子もいた。大人があえて教えなくても、野菜作りを通してなんとなくではあるが、食物連鎖のしくみが分かり始めているのかなと感じた。

1人の子どもの「タネ、取ってみたい」という一言からはじまったタネ集めが1年以上にわたって続くとは思わなかった。子どもたちの「知りたい」「やってみたい」という探求心を大切に、一緒に考えたり、試したり、失敗したり、その都度、子どもたちとたくさん対話や意見を伝え合いながら進めてきた。ひとつひとつの出来事が、楽しさの中にも学びがあり、とても充実した時間だった。

今は子どもたちと一緒に

タネから・・・ほうれん草、小松菜、さといも(タネ芋)、
綿、ゴマ、ピワ、ふうせんかずら

苗から・・・米、オクラ、カラーピーマン、すいか
などを植えて、世話や水やりをしながら大切に育てている。そして、ブロッコリー、菜の花(昨年の卒園児が育てたものを引き継いだ)のタネの採取を行った。④また「自分たちで育てた野菜をみんなにも食べてもらいたい!」という子どもた

考察③

- ・図1で示したように、経験を積むことで、大人から教えてもらわなくても、自分で物事の経緯を理解し、その先をイメージして考えられるようになっていく。



令和7年4月10日

考察⑨

- ・自分たちが育てた野菜への自信が、「みんなにも」という気持ちに繋がり、社会性の育ちを感じる。

ちの要望で、園舎側の「みんなのはたけ」の前にパラソルを開き、テーブルを用意し、のぼりを立て、道の駅のように販売所をつくった。タネから育てた小松菜やほうれん草、また採取したタネも、保育園で使えるお金を作り販売をはじめた。みんなに喜んでもらえて、子どもたちは充実感を味わい、うれしそうであった。



手作りのしょいこに小松菜を入れて売ります

考察⑩

- ・子どもの要望にすぐに応え実現することで、子どもが充実感、達成感を味わうことができ、意欲が高まっていくことに繋がっている。

年中組は、カブのタネを植え育てている。年少組は昨年収穫した小豆を今年も植え、収穫を楽しみにしている。子どもたちから夢中になる楽しさを教えてもらった「タネから植えてタネになるまで」の野菜の一生をこれからも一緒に楽しみながら見届けていきたい。



4.実践から学んだこと

今回のように「大きく育たなかったすいか」(失敗)から始まった「タネ」への探求心(科学する心)の高まりは、保育の形そのものに結びつくものがあると思われる。日常の中で、「思い通りにならないこと」「うまくいかないこと」は多々起こってくる。そのたびに「どうすればよいか」「今、自分は何をすればよいか」を考え行動することが“主体的”な行動へと結びついていくと考える。主体的な行動ができるようになると、“自分で考え行動する”ことの面白さ、楽しさを感じることができ、“次はこうしてみよう”“こうしたらどうなるかな”という探求心(科学する心)が芽生えてくるのではないと思われる。図1でも示したように、今回の実践もアクシデントを乗り越えることを繰り返すことで、大人の関わりが少なくても子どもの自発的な活動が多くなっている。この実践から、子どもの探求心(科学する心)は無限大であり、はじまりは小さなことでも、大人の関わり方でさらに深まり広がることを改めて学んだ。アクシデントや失敗に対して、自ら考え次の行動を決断し、問題を解決して乗り越えていくからこそ、成功した時の喜びや達成感を味わい、自信へとつながり、次への探求心(科学する心)が育っていくことを学んだ実践でもあった。

5.今後の課題

今回の実践は、アクシデントの度に、まず“子どもの思い”を受けとめ、“どうしたらいいか”一緒に考え、“やってみる”ことを繰り返している。思いを受けとめてくれる大人が側にいることで、子どもは安心して思いを出せるようになる。“子どもの思い”や“自発的な活動”から生まれた遊びは、多くの“学び”に繋がっていくものであると考える。保育士は“子どもの思い”を瞬時に汲み取り、環境を整え“自発的な活動”へと繋げていく役割を担っている。そのような環境の中で、遊びを続けていくことで、子どもは“自己”を確立していくと考える。当園は、“0歳からの主体性を育む保育”を保育方針としている。0歳児の思いや意志をくみ取り、尊重しながら保育している。今後は「0歳児における科学する心を育てるとは」をテーマに、穏やかな安心感のある環境の中で、0歳児はどのように科学する心を育てていくのかを探っていきたい。



フンから芽が出たよ！！
「ヒヨドリからのプレゼントじゃない？」
(見つけた子どものつばやき)

【研究代表者名】島邊 裕子
【園長】嶋田 栄子
【執筆者名】島邊 裕子・土井長 久美